

はしがき

寺田寅彦がわれわれを惹きつけるのはなぜであるか。

これから試みようとする研究はこれをテーマとする、少なくともライトモティフとする。これに対する答え、あるいは答えへの試みはなかなか簡単にはいかな。寺田寅彦という人物は実に多くの要素を含む複合体である。コンプレックスである。われわれはそのすべての要素を捕らえることは非常に困難である。これ捕らえることは化学の分析と違って、どうしても主観的な判断の加わった分析に訴えなければならぬからである。だから、それを行う人によってかなり違った結果が出てきてもいっこうに不思議ではない。しかし、われわれが真に事実を見ようと努力してみるならば、一見相違したような結論を得たとしても、根本においては必ず相通すべきあるものに到達しうらと思う。われわれがここでこのむずかしい分析を試みようとするのはこのような予感があるからである。

また一方において、われわれはそのような分析をしないで、この寺田コンプレックスのまま、かかるものとして、さながらに理解すればよいではないかと、なにごと分析々々というのは近代的通弊であつて、分析だけでは全体を理解することはできない、総合的な把握が肝要なのだ、という見方もあるかもしれない。しかしながら、多くの面を備えたものを全体として見るためには、少なくともこれをはなはだ多くの角度から見る必要があるのはいうまでもない。全体をみるという総合作用はその上でなされるべきである。

分析といったのも、種々の角度から見るといったのも、いずれも比喩的表現であるから、結局同じことであり、要するに科学的な見方してみようというのに他ならない。そのような見方をした上で初めて寅彦の特質を具体的に捉えることができると思う。そうして、それを掴むことによつて寅彦への理解が深められ、われわれの学ぶべき点があるとすればそれがなんであるか等もはっきりするであらう。また必ずしも学ばなくてもかまわない。なにかを感じとるだけでもよい。寅彦研究を試みようとするのはこのような意図に基づくのである。そうして、この問題の究明に入らんがために冒頭に述べた問題を設定し、それを鍵として閉ざ

された扉を開くことを試みようとするのである。閉ざされた扉というひとく誇張するようでもあるが、これまで寅彦について語られたものは少なくないけれども、多くは弟子共の甘い追憶であるか、知友の断片的な回想であるか、また一般者のものにしたところがきわめて主観的な品評であって、研究という角度からなされたものはあまり多く思いつくことができない。私自身もその甘い追憶をいくたびか語ってきたのであるが、一方においてもっと冷徹な研究を望む心がなかったのではない。私はかねがねこの問題を心にもっていたけれども、力足らずして手をつけることができなかった。しかし、いくら待っていても、もうそれができると思える日は永久に来そうにも思われない。できてもできなくてもやってみるより他に方法はない。思うに寺田寅彦のごときは希有なる存在であるから、単に尊敬し、なつかしみ、あるいは軽蔑することとは別にもっと研究してよいのである。比喻をもつていうなら、ドイツ人がゲートを研究するがごとく研究していいのである。断つておくが、これはなにも寅彦をゲートに比したのではない。いま、この小論では私が現在考えていることだけでもその全部を書き記すことはできないが、その見通しだけでも書いてみようとするのがこの小稿の目的である。寺田寅彦研究序説と題するゆえんである。

一 寺田寅彦の科学

寺田寅彦はすぐれた科学者であり、同時にすぐれた随筆家である、というのがごく大ざっぱな、そうしてごく普通の見方であろう。これはその限りにおいて間違いではあるまい。それぞれの専門家がそれぞれの専門においてれば立派なものだというなら、われわれはそれを承認するほかはあるまい。そうして、一人の人間がこういう二つの、かなり種類が違っている活動を併せ行い、同時に二つの方面にすぐれた仕事をなすということは希有なことだと考えられる。そうして、この希有だということそれ自身が寅彦の価値であるかのような考え方も世間にならぬとはいえない。これはいうまでもなく浅薄な見方である。二つの方面における偉さのために偉さが二重になることはあっても、単に希有だということのなかには絶対の価値を認めることはできないのである。こんなことは分りきったことであるけれども、幾何学の本を開いてみると初めは分りきったと思われるようなことが書いてある。私はこのような書き方をおそらく科学から学んだのであろう。

寺田寅彦は一方において文章家であろうが、なかるうが、その本領はいうまでもなく科学者である。これは寅彦自身がそう意識していたと同時に一般にもそう認めなければならぬところである。もっと具体的にいえば物理学者であり、さ

らに限定すれば実験物理学者である。われわれが寺田寅彦に惹きつけられるとすれば、彼の科学者としての偉さに惹きつけられるのがもっとも第一義的な惹かれ方であるに相違ない。しかし、それには惹かれる人が科学の研究者ではないまでも、少なくとも科学にかなりの程度の理解を有し、かつ寅彦の科学者としての偉さを認識するのだからならぬ。けれども、これはかなり限定された範囲に属することであって、それが第一義的な惹かれ方であるという命題はそんなに固執すべきものではないと思われる。なんとすれば、科学者としての偉さは専門家でなくてもかなりの程度まで認識することはできるのであるから、したがって尊敬することもできる。たとえば、ファラデーの仕事を全部知らなくてもファラデーの偉いことは、それぞれの程度において誰でも認めることはできるであろう。したがって、あるいは親しみをさえ感ずることもできるであろう。ファラデーの名をあげたのは表現の便宜のためであって、寅彦をファラデーになぞらえたのではない。寅彦の場合にはその科学者としての偉さもただ漠然といわれているだけで、まだ鮮明にはされていないのである。

私がこの小論の出発を、われわれが寅彦に惹かれるのはなぜであるか、ということにおいたのは、すでにこれを科学の問題とするよりも、むしろより多く人間の問題につながることを内包していたのである。われわれが寅彦に惹かれるというのは、科学の問題を通り抜けて人間的な意味において惹き付けられることを意味している。したがって、これは一般の人間の問題であって、科学に理解をもつということは、有用なことではあっても、必ずしも絶対必要な条件ではないのである。現に多くの一般の人が寅彦に興味を抱いており、なかにはその理解は科学の道にある者よりもはるかに深いと思われる人もけっこう少なくないことは、これを証拠立てている。しかし、われわれは一足飛びにこつこつという本質論に入る前に、もう少し、形式的な問題を片づけておくほうが便利である。

寺田寅彦の科学者としての偉さはなにかの発見というように簡単に言い現されるものではない。発見もいくつもあるけれども、問題の名前だけいえば人があれかと思うほど大きなものではないから、これを持ち出すには話の順序として種々の準備をなし、その問題をめぐる学問の従来の状態を述べたうえで、そこへ寅彦がこれだけのことをしたのだというのでなければ正確ではない。しかし、それをするにはいまは適当な場所でもないし、また仮にやってみるといわれても私には急にはできない。研究範囲もひじょうに広く、一般の実験物理学および地球物理学にわたっており、地球物理というなかには地震などのほか気象学や海洋学なども含まれる。これらに関する論文が二百余編ある。それらのうちで、どれが重要

な研究かといわれても返答に困る。そういう評定はまだ学会においても十分にはなされていないようである。では、それらの研究を貫く特質はなにかと問われても、これも簡単に答えることは困難である。しかし、困難だといっただけでは始まらないから表現を与えてみようと思つたときに、私は次のような言葉を思い浮かべていた。「Er war Physiker allzeit wenn er wachend.」まずドイツ語がもしれないが、そういう形で頭のなかに浮かんできたのだからしかたがない。日本語になおせば「彼は目が覚めているときはいつでも物理学者(科学者)であつた。」という気の抜けたような表現になる。科学者でも研究室では研究しているが一歩研究室を出ると科学者でない人もたくさんいる。「彼はいつでも科学者であつた」という私のいくぶん奇矯に響くかもしれない言葉は、彼が道を歩いていながら濡れた人造石上で靴のゴムがひどく滑つたことからゴムと人造石の摩擦の問題を考える等々の事実根ざしているのである。のみならず、彼は随筆を書くときでもやはり科学者であつた。彼のなかの芸術家がおもに働いているときでさえも、彼の科学者は少なくとも決して眠つてはいなかつた。もう一つの例を中谷宇吉郎の「寺田寅彦の追憶」のなかから引用してみよう。「或日こんなことがあつた。／何かの用にあてるために、砂を菓子箱の蓋に一杯入れて、実験台の隅にのせてあつた。先生は午後の御茶の時間に、例のように上機嫌で一同を煙に捲きながら、その紙箱をいじつておられた。砂をのせたその紙箱は、横側を押される度に歪んだ。すると中の砂はさらさらと崩れて、何本かの罫がはいつた。何も珍しい現象ではないので、火鉢の中に灰鉢を立てて左右に動かすという悪戯をして見た人は、誰でも灰に罫がはいつて崩れることを知つていようである。先生はじつと砂の表面に見入りながら、急に黙り込んで何時までも箱の側面を引いたり押したりして居られた。皆もちよつと手持無沙汰な恰好で砂の割れ目を怪訝そうに見ていた。／大分経つてから先生は口を切られた。＜君たち、此の現象をどう思いますか。砂が崩れる時に出来た罫は、こつして逆に押し戻しても埋まらなくて、皺になつて盛り上がるでしょう。こつという不可逆的(イルレバシバル)な現象は、摩擦が主な役割を演じている場合にかぎるので、これは大変面白い現象なんです。一つ断層の研究を始めようじゃありませんか＞という話であつた。／先生の断層や地震の変形に関する色々の研究というのは、その起りは此処にあつたのである。そして此の研究に芽生えた思想は、紛体の特殊な性質の研究や割れ目の理論を経て、遂に先生晩年における＜生命と割れ目＞の論文まで、発展して行つたのである。」(七八 七九ページ)

こつという研究態度に対して、彼の没後間もなく、ときあたかも全集刊行が始められているころ、小屋掛け物理学というような悪口も現れた。日常身辺から問題を

取り上げ、有り合わせの道具を使って研究するのを、かくは呼んだのであろう。しかし、その見立ては大事なことを取り落とししている。寅彦は最悪の場合でもそこにあるだけのものを利用して研究することを実践をもつて示しているのであつて、掘立て小屋を本領としているのではない、ということである。現に彼は早くエックス線の結晶によるラウエ斑点の実験を行い、優れた結果を出しているのであるが、それさえも医学部で使い古したエックス線管球をもらつてきて行つたのだそうである。大学の理学部においてさえもそれが日本の科学研究の状態だったのである。堂々たる構えの鉄筋コンクリート式の研究は日本のあの時代においてはやろうとしても困難であつた。ただ、そういう研究を将来するための積極的な努力はしなかつた、というならば、それはそのとおりであらう。また、小屋掛け式という言葉は、そういう道具立てのことだけではなく、腰を落ちつけてどつしりとした研究をしないで、方々へ小屋を移して行くという批評をも含んでいくつもりかもしれない。しかし、それはむしろ趣味の問題であつて、思いつきつくまに研究題目を次々に追つて行くことが科学の研究上邪道であるとはいえない。しかも手をつけた以上必ずある成果を、あるいはすばらしい成果をあげているにおいておやである。科学者のなかにはいったん取り上げた問題をいつまでも離れず、少なくともその近くへへばりついているという人もある。それも結構であるが、どちらが推賞すべきであるかは科学の問題ではないであらう。科学にとつてはおそらく両方のタイプの研究者のいることが必要なのである。一歩を進めていえば、もっと種々のタイプの研究者がいるほうが望ましいのである。寺田寅彦の科学を低回趣味の科学という人もあるようだ。実際そうもいえるであらうし、それは本人も認めるところかもしれない。しかし、要はどんな成績をあげるかということにある。

科学者のタイプといふことについては”ルクレチウスと科学”のなかに面白い一節がある。「今かりに現代科学者が科学者として持つべき要素として三つのものを抽出する。一つはルクレチウスの直観能力の要素であつてこれをLと名づける。次は数理的分析の能力でこれをSと名づける。第三は器械的実験によつて現象を系統化し、機能する能力である。これをKと名づける。今もこの三つの能力が測定の可能な量であると仮定すれば、LSKの三つのものを座標として、三次元の八分一空間(オクタント)を考え、その空間の中の種々の科学者を配当する事ができるであらう。ノヘルムホルツや、ケルヴィンやレイノルズのごときはLSKいずれも多分に併有していたものの例である。現存の科学者ではジェー・ジー・タムソンがこのタイプの人であらう。ファラデーや現代のラザフォードやウッドのごときはLK軸の面に近く位している。ボルツマン、プランク、

ボーア、アインシュタイン、ハイゼンベルク、ディラックらはLS面に近い各点に相当する。ただL=0すなわちSKの面に坐する著名の大家を物色する事が困難である。あるいはレーリー卿のごときは少なくともこの座標軸面に近い大家であったかもしれない。』（小宮豊隆編「寺田寅彦随筆集」、岩波文庫、一九六三年版、第二巻、二五八―二五九）

寺田寅彦をこのLSK空間に配するとすれば、どこへいくであろうか。それはLK軸の面に近いところ、つまり右の例でラザフォードやウードのいる面の近くへ配するのが適当であろう。もしこの著者が草葉の陰でこれを聞くということが可能であるとすれば、顔をあからめてラザフォードなどの近くへおいては困る、というかもしれないが、原点からの距離は別として、前述の面内に配すべきは衆目の見るところであろう。換言すれば、この著者においてもっともすぐれていたのは、ルクレチウスの直観の能力であり、これに配するに器械的実験によって現象を系統化する能力があった。数理的分析は長ずるところではなかったのである。

さきに「彼はいつでも科学者であった」といつたけれども、これは一つの表現であつて、もとより必ずしも全貌を捉えているものではないであろう。もう少し違った見方をするならば「彼は人の気がつかないような、気がついても取り上げないような問題をとり上げた科学者であつた」ともいえるであろう。これはすでに述べたところといくぶん関連することであるが、こういう面を示すのにちょうどよい例がある。それは線香花火について書いたなかの一節である。「このおもしろく有益な問題が従来だれも手を着けずに放棄されてある理由が自分にはわかりかねる。おそらく、文献中に見当たらない」、すなわちだれもまだ手を着けなかつたという事自身以外に理由は見当たらないように思われ。しかし人が顧みなかつたという事はこの問題のつまらないという事には決してならない。／もし西洋の物理学者の間にわれわれの線香花火というものがある普通知られていたら、おそらくとうの昔にだれか一人や二人はこれを研究したものがあつたらうと想像される。そしてその結果がもし何かおもしろいものを生み出していたら、わが国でも今ごろ線香花火に関する学位論文の一つや二つはできたであろう。こういう自分自身も今日まで捨ててはおかなかつたであろう。／近ごろフランス人で刃物を丸砥石でとぐ時に出る火花の形状からその刃物の鋼鉄の種類を見分ける事を考えたものがある。この人にも提出したら線香花火の問題も案外早く進行するかもしれない。しかしできる事なら線香花火はやはり日本人の手で研究したいものだと思ふ。／西洋の学者の掘り散らした跡へはるばる遅ればせに鉱石の欠けらを捜しに行くもいいが、われわれの足元に埋もれている宝をも忘れてはならないと思ふ。しかしそれを掘り出すには人から笑われ狂人扱いにされる事を覚悟するだ

まだ十分ではないけれども、われわれは先へ進まなければならない。寺田寅彦の科学がいかなるものであるかは論文を見なくても、幸いにしてその隨筆のなかにかなりよく見る事ができる。いま、線香花火に関する一節を引用したのはその一例を示したのである。このような科学にたいする考え方の現れているところは無数といつてよいほど沢山ある。私は、寺田寅彦がわれわれを惹きつけるのはなぜであるか、という立場から出発して、彼の本領であるところの科学の研究について簡単な考察をこころみだ。そうして、彼の研究方法にわれわれが魅力を感じるところがあるのも確かであると思う。しかし彼のもとへ多くの人々が教えを乞いにあるいは助力を求めにいったという事実は、彼がよき知恵を与うる能力者であったということを経証立てているのは確かであるが、この学問上の魅力だけが人を惹きつけたとは考えられない。それは学問上では尊敬するけれども、どうも教えを乞いに、助力を仰ぎには行きにくいという場合も多くあることからわかる。だから彼の科学の研究法に惹きつけられたということはあつたにしても比較的少数の場合であつて、われわれを惹きつけるもの、という一般的課題はこれだけでは解決されない。したがつてこの問題はもう少し先へ持ち越されなければならない。

二 科学と芸術の問題

寺田寅彦という科学者のなかには一方において芸術家が住んでいた、ということとは一般に認められていることのように思う。それがどういふ種類の芸術家であるか等の問題についてはその道の人の論評にまたねばならぬが、寺田寅彦の書いたものがわれわれにさえ非常に芸術的な感銘を与えることは紛れもなき事実であるから、われわれはそれについて感想を述べることもできるし、またその感銘の性質を考えてみることもできる。本来科学者である人が同時に芸術家であるということは珍しいことと考えられる。科学と芸術はもともとかなり性質の違ったもの、むしろ融和しがたいものときえ一般に考えられていることである。しかし、そんなに融和しがたいものでないということは、彼がすでに大正五年の昔に書いた文章「科学者と芸術家」(同前、一巻、八六—九四)のなかで述べている。まずその初めにおいて、「芸術家にして科学を理解し愛好する人も無いではない。また科学者で芸術を鑑賞し享樂する者もずいぶんある。しかし芸術家の中には科学に対して無頓着であるか、あるいは場合によっては一種の反感をいだくものさえあ

るように見える。また多くの科学者の中には芸術に対して冷淡であるか、あるいはむしろ嫌忌の念をいだいているかのように見える人もある。場合によっては芸術を愛する事が科学者としての墮落であり、また恥辱であるように考えている人もあり、あるいは文芸という言葉からすぐに不道徳を連想する潔癖家さえまれにはあるように思われる。「といい、「これは自分の年来の疑問である。」と述べている。そして「科学者と芸術家の生命とするところは搜索である」とし、けっきょく「二人の目ざすところは同一な真の半面である」というのであらう。これを読んでいると、いかにもと思われ、反発を感じるようなところは少しもない。そして、規模の大小は別として、誰にでも科学者になれ、同時に芸術家にもなれそうな気がしてくる。思うに、これは可能なる世界、ポッシブル・ケースを指摘しているものだからであらう。しかし、連れて行かれた可能性の世界から現実の我に返ってみると、それはポッシブルではあるが、けっしてプロバブルではないのである。

ここで初期の文章から引用したのはその頃すでにこの問題が当の本人によって論じられていることをあわせて注意せんがためであった。これだけの議論ではいささか抽象的の嫌いもあるが、彼はこの科学者と芸術家の二人が生命とする創作活動を一人でかね行い、ここに述べてあることを実行において示しているのである。もつとも実行において示している、というのはそばから見ての話であって、彼においてはあのおのずからの行動がなくなつたのであらう。(途中から彼という言葉が多くなつたことに気がついた。日本語の彼というのはあまりよい感じがしないと見る向きもあるかもしれないが、ヨーロッパ語で客観的に書こうとすれば、こういふ言い方は普通のはずである。)

それから後にもこの問題に触れているところはこれまたいくらかも見いだすことができるが、ずっと後に「科学と文学」と題する文章があり、このなかには芸術のうちのとくに文学と科学とが対比され評論されている。しかし、いまそれに触れることは止めよう。そのかわりに、彼の書いたものが科学で同時にいかに文学的な香気をわれわれに感じさせるかということをもつて示してみようと思う。

「春六題」(大正一〇年)のなかのその「六」に次のようなところがある。

「日本の春は太平洋から来る。

ある日二階の縁側に立つて南から西の空に浮かぶ雲をながめていた。上層の風は西から東へ流れているらしく、それが地形の影響を受けて上方に吹きあがる所には雲ができてそこに固定しへばりついているらしかつた。磁石とコンパスでこ

これらの雲のおおよその方向と高度を測って、そして雲の高さを仮定して産出したその位置を地図の上に当たってみると、西は甲武土岳から富士箱根や伊豆の連山の上にかかった雲を一つ一つ指摘する事ができた。箱根の峠を越した後再び丹沢山（たんざわやま）大山の影響で吹き上がる風はねずみ色の厚みのある雲をかもしてそれが旗のように斜めになびいていた。南のほうには相模半島から房総半島の山々の影響もそれと認められるように思った。

高層の風が空中に描き出した関東の地形図を裏から見上げるのは不思議な見物（みもの）であった。」（同前、第一巻、二〇〇―二〇一）

これは科学的であると同時に一篇の美しい詩を感じさせる。それがどういふ文学であるかの確にいうことは私にはできないけれども、とにかく科学から感ずるのとは違った美しい味わいを感じるのは事実である。ここには科学者と芸術家が仲よく同居している、というよりも渾然として一体となっているのを感じさせる。寅彦の随筆はユニークであるということはすでに定説であるが、ここにあげたものなどはユニーク中のユニークである。これに類する味わいをもったものを捜してみるのにわずかにジョン・チンダルをあげうるのみである。このようなユニークな美しさの例はまだいくらもあげることができるがあまり長くなるから止めよう。

寅彦の創作にはこのようなエッセイ、日本風について随筆のほかに、俳句、いつそう広義に言えば俳諧がある。これは私は遠くの方から眺めるだけの世界であるが、かすかな縁の糸はこの世界にもつながっている。それはすでに書いたことがあるから止めるが、一つの追憶を書いてこの稿は終りとしよう。東北の方を旅行するとき「奥の細道」一巻を懐にして行く、というのはつららかな春の日に「瓢を携える式の月並かもしれぬが、私もかつてかくして松島に遊んだことがある。そこから絵はがきに句らしきものを書いて先生に出したことがある（ここは先生と書かなくてはどうしても具合がわるい）。返ってきてからお目にかかったとき「君は俳句をスタディしたことがあるのか」といわれたのは、まさに頂門の一針であった。そのとき、小学校時分に松根さんの弟子の先生から手ほどきを受けた等と臆面もなく、あるいは正直に答えたかどうかは忘れてしまった。

さて、元に戻って、寅彦の世界は科学と芸術という一見融和しがたいもの融和した独特の世界であるということとは、もはや異論のないところであろう。そういう珍しい結合からかもしだされたユニークな世界がわれわれを強く惹きつけるということも疑いのない事実である。しかし、よく考えてみると、そういうユニークな世界というものはわれわれの興味を惹くのに十分であるとしても、それは

われわれを惹きつけるということのうちの本質的なものではないと思われる。なんとすれば、彼の科学は科学として、彼が芸術家であるか否かを顧慮することなく考えていいことであり、また彼が芸術家であるとするならば、その芸術は科学とは一応引き離して見ていいことだと思えるからである。このユニークな世界に対する漠然とした興味のごときは、いずれか一方の世界に深く傾倒するというのに比べてはるかに皮相的なものしか思えない。彼がひじょうに芸術的であったということのために彼の科学に甘い点をつける、ということがもしありとすれば、それは寅彦を正しく見る道ではないし、また芸術の側についても同様のことがいえるであろう。だから、希にみる才能の結合ということは十分尊重に値するとしても、われわれを惹きつけることの本質的なものではない。それは寅彦の人間である、などといってしまえば一応の答にはなるであろうが、私が求めようとしているのは、しかく形式的なものではないのである。

三 寺田寅彦の諸要素

以上二つの節で考えてきたことは、いささか形式的に墜ちた見方のよつてであるが、寺田寅彦を理解せんとするには一応このようなことを考えておく必要があると思われたのである。今度は科学とか芸術とかいうことには拘泥せず、私が理解しうるかぎりにおける寅彦の諸要素を抽出すること、あるいはその諸相を見ることを試みたいと思う。

前に寺田コンプレックスということをいったが、寺田寅彦という人間はかなり複雑である。その複雑さを理解するには彼の生い立ち、生涯の経験などを見ることも参考になるには違いないが、いまはそれらには触れない。前にも少し触れたように、寅彦が自ら随筆と呼んだ書き物のなかにはひじょうに科学的な要素の多いものがたくさんあって、なかには柔らかく書いた科学論文といってもよいものがある。したがって、いわゆる随筆といわれている文章だけからでも寅彦の科学について多くのものを知りうるということも前に述べたとおりである。そこで、その随筆として書かれたものを子細に研究すれば彼の全貌をほとんど余すところなく捉えうるという可能性がある。もちろん、それをなすうるためには能力者でなければなるまいが、問題としてこれは十分成立しうる範囲内においてこの問題を研究してみようと思う。次に述べようとすることはあるいは「寅彦随筆研究」のような形に見えるところがあるかもしれない。それも面白いのだが、いま目指しているのはそれではなくて、随筆を材料とした「寅彦研究」なのである。しかし私は随筆集も全集も戦争のために失ってしまって手元にない。いま利用し

うるのは今度岩波文庫に収められた”寺田寅彦隨筆集”一巻および二巻だけである。小宮隆豊の「後語」を見ると、この選集は初めは芸術的香気の高いものを採録するつもりだったが、途中から編集方針が科学的精神に重きをおくように変わったのだそうである。この変更はわれわれにとつて幸せなものであり、世間一般にとつてもおそらくそうであろうと思う。おかげでこのなかには「柔らかく書いた科学の論文」という感じのものもだいぶ含まれることになった。寅彦の科学はその隨筆といわれる文章のなかからかなりの程度まで理解しようと前に述べたことはこの選集によつてほとんど十分に実行しうるといつてよさそうである。その既刊の二巻は”藪柑子集”の初期から昭和五年までを含んでいる。予定されているあと三巻が出れば前述のことはいつそうよく実行可能になるわけである。(原注 これは一九四八年五月の状態である。)

芸術的香気の高いものといえば初めく藪柑子集に収められた諸編などはまさきにあげられるものである。その後にもこの系統をひくものが多少はあるけれども、だんだんときが進むに従つて芸術だの科学だのという区別はなくなつていふと思う。たとえば「向日葵」という隨筆(同前、第二巻、一三五)は「中庭の籐椅子に寝て夕映の空にかがやく向日葵(ひまわり)の花を見る。云々」という書きだしで、その辺は世間で普通にいう隨筆であるが、それから十行ばかり行くと「物理学上の文献の中でも浅薄な物理学者の理論的論文ほど自分にとつてまらないものはない。云々」といい、理論物理学と実験物理学について述べたところがこの一編の半分以上を占めているという具合に、想像の赴くがままになんら顧慮することなくきわめて自由に語られるのである。

以下において私は寺田寅彦の諸要素と思われるものを隨筆のなかから引き出してみようと思う。思いつくままに書くのであつて、必ずしも初めから軽重をつけてるのではない。

まず氣のつくことは、いままちょっと触れたが、想像力の豊かさである。科学においてもイマジネーションの肝要なことはチンダルなども古くからこれをいいこの著者もしばしばそれをいつているが、その隨筆のなかに奔放なる想像力がいたるところに現れている。その一つ二つの例をあげてみよう。「舞踊」(同前、第二巻、一五五)という短い文章は「玉」という猫のある特殊な挙動のことを前半に書いているのであるが、つづく後半は次のようになっている。

「猫が人間の喜びに相当するらしい感情の実現として、前足で足踏みをするのは、食肉獣の祖先がよい獲物を見つけてそれを引きむしる事を行ったのとある關係があるのではないかという荒唐な空想が起る。また一方原始的の食人種が敵人をほふつてその屍の前に勇躍するグロテスクな光景とのある關係も示唆される。空

想の翼はさらに自分を駆って人間に共通な舞踊のインスティンクトの起源という事までもこの猫の足踏みによって与えられたヒントの光で解釈されそうな妄想に導くのであった。

赤ん坊の胸を持つてつるし上げると、赤ん坊はその下垂した足のうらを内側に向かい合わせるようにする。これは人間の祖先の猿が手で樹幹を押さえようとした習性の遺伝であろうと言った学者があるくらいであるから、猫の足踏みと文明人のダンスとの間の関係を考えてみるのも一つの空想としては許されるべきものである。」

実におそるべき想像力ではないだろうか。そうして、その科学の研究もこのようなファンタジーに導かれていたとみられる場合がたくさんある。豊かな想像力は病後の保養のつもりで写生にいった著者をも休ませない。世の中や人間の世界に対しても同様に働き「絵の世界はこの上もなく美しい。しばらくこの美しい世界にのがれて病を養おうと思っても、絵の底に隠れた世の中が少しの心のすきまをうかがってすぐに目の前に迫ってくる。これは私の絵が弱いのか世の中が強いのか、どっちだかこれもよくわからない。」(同前、第一巻、二五五)といわせる。これを引用したわけは長くなるから、その少し前から参照されたい。

この著者が真に対する鋭い感覚と同時に、美の感覚をもっていたことはいつまでもないが、その美の感覚がどのような性質のものであったかは次の一例からも分かりはしないかと思う。「草刈り」(同前、第二巻、一二五)のなかに次のような一節がある。

「およそ地からはえ出る植物に美しくないと思うものは一つもなかった。せつかくはえたものをむざむざむしり取るのが惜しいと思われた。旧城社(し)やその他の荒れ地に勢いよく茂った雑草見るから気持ちが悪かった。そういう所にねころんで鳥の歌、蜂のうなりを聞くのは愉快であった。油絵の風景画などでも、破れた木柵、果樹などの前景に雑草の乱れたような題材は今でもいちばん心を引かれる。」

こういう美の感覚の底には思いやりの心がはたらいている。物の本性を見きわめると同時に、そのものの本来の美しさを感じとっているのである。それは物の本性を見きわめたうえでそこに強いて美を認めようとするのでなく、二つのことが同時に行われていると思われる。真と美とは同じ物の両面である、というのがこの著者の根本の考えである。たとえば、野草を採ってこれをしらべ、あるいは顕微鏡によってその細部を科学的に観察することは、その美しさを増しこそすれ傷つけるようなことは少しもない、と述べたところもあるが、これも同じ精神から出た言葉である。

この著者の書くものには、痒いところを搔く感じがあると思う。「草刈り」(同

前、第二巻、一二六)のなかに「よく切れる鎌で難いで行くのは爽快なものである。また草の根をぶりぶりかき切るのも痛快なものである。かゆい所をかくような気がする。」と述べているように、この感じをよく味わう人であるのはいうまでもないが「調律師」(同前、第二巻、一四五)のなかで

「たくさんな弦線の少しずつ調子の狂ったのを、一定の方式に従って順々に調節して行く。鍵盤のアクションのぐあいの悪いのを一つ一つたねんに検査して行く。これは見ても気持ちのいいものである。かゆい所をかくに類した感じがある。すっかり調律を終わってから、塵埃を払い、ふたをして、念のために音階とコードをたたいてみていよいよこれで仕事を果たしたという瞬間はやはり悪い気持ちはしないであろうと想像される。」

と書いている。これは物をそれが本来あるべきところに置く感じである。そうして、それをなしうるためには物事に対する周到なる理解と同時に思いやりの心が必要である。私は「ここに寺田寅彦の愛を感じる。」「解かれた象」(同前、第二巻、一〇三)の書き出しは「上野の動物園の象が花屋敷へ引つ越して行って、そこで既往何十年とかの間縛られていた足の鎖を解いてもらって、久しぶりでそのそと檻の内を散歩している、という事である。話をきくだけでもなんだかいい気持ちである。肩の凝りが解けたような気がする。」となっている。この肩の凝りが解けたような気というのも痒いところを搔く感じに近いものであり、そこでは象の身になって物事を考えている。

いま私は思いやりとか愛とかいったが、それは文中にいくつかある猫の記述などにも見られるし、その他たくさんある。「Über die Urtiere」という随筆の「(同前、第二巻、二六三)に震災後浅草凌雲閣の爆破を見にいった話がある。爆破がもつじき始まるうとするとき「一匹の小さなら犬がトボトボと、人間には許されぬ警戒線を越えて、今にも倒壊する塔のほうへ、そんなことも知らずにうそつそひもじそつに焼け跡の土をかきながら近寄って行くのが見えた。」とあり、爆破が終わってから、あの時に塔のほうへ近づいて行ったあの子犬はどうしたか。当時を思い出すたびに考えてみるのだが、これはだれに聞いても到底わかりそうもない。「といい、さらさら」「こんな哀れな存在もあるのである。」という一句をもつてこの文を終わっているのである。

もちろんその思いやりの心は動物に対してのみ見られるのではない。同じ題の随筆の「六」(同前、第二巻、二六八)の初めに

「ある大学講堂の前へ突き当たって右の坂道へおりようとすると曲がり角に、パレットナイフのような形の芝生がある。きちょうめんにちゃんと曲がり角を曲がっているのと、その芝生の上を踏みにじって行くのとで、歩く距離にすれば三尺とはちがわない。しかし多くの人がその三尺の距離の歩行を節約すると見えて芝

生がそこだけ踏みつぶされてかわいそうにはげている。この事を人に話したら、それは設計が悪いのだという。そんな所へ芝生をこしらえるのが間違っていると言われてなるほどそれもそうかと思った。」

とある。ここでは、踏みにじられた芝生を、「かわいそうにはげている」といっているのである。ここでは目につきやすい二、三の例だけをあげたのであうが、実はこれは深い本質に根ざしている事と思う。

私は寺田寅彦のなかに西洋と東洋の不思議な混交を感じる。西洋の学芸の深い教養からくるハイカラはこの著者のものからだれでもすぐに感ずるであらうが、また同時に東洋的地味をも感ずる。著者は、自分は日本的なつもりだというに相違ないのであるが、その要素としては西洋的なものと東洋的なものがあると思う。それらが不思議な調和を保っているなどとは私には片づけきれないけれども、確かに二つの要素が感じられる。その例は至るところにあるといってもよいほどであるが、一つ上げてみよう。「備忘録」中の「夏」(同前、第二巻、一三二)という文のなかに

「喫茶店の清潔なテーブルへすわって熱いコーヒーを飲むのも盛夏の候にしくものはない。銀器の光、ガラス器のきらめき、一輪さしの草花、それに蜜蜂のうなりに似たファンの楽音、ちよとそれは「フォーヌの午後」に表された心持ちである。ドビュシーはおそらく貧血性の冷え症ではないかと想像される。」

という一節がある。これを見ると目が眩むようであるが、同じ「備忘録」の「仰臥漫録」(同前、第二巻、一三〇)のなかでは

「何度読んでもおもしろく、読めば読むほどおもしろさのしみ出して来るものは夏目先生の『修善寺日記』と子規の『仰臥漫録』とである。いかなる戯曲や小節にも到底見いだされないおもしろみがある。なぜこれほどおもしろいのかよくわからないがただどちらもあらゆる創作の中で最も作爲の跡の少ないものであって、こだわりのない叙述の奥に隠れた純真なものがあらゆる批判や古(こ)価を超越して直接に人を動かすのではないかと思う。そしてそれは死生の境に出入する大患と、なんらかの点において非凡な人間との偶然な結合によってのみ始めて生じうる文辞の宝玉であるからであらう。」といっている。子規はなかなか西洋趣味であった人であるが、それにしても「仰臥漫録」を読めば読むほどおもしろいというのはいわゆるハイカラとは違った地味なものであると思う。西洋映画を論ずるときに去来の句が出てきたり(前出、第二巻、二八〇)、「龍(おぼろ)夜を流すギターやサンタルチア」というのがあると思うと、「日当りや手桶の蜷舌を吐く」というのもある。不思議な混交というほかはない。そのよって来るところはなんであるか、ということの究明はそれ自身一つの大きな課題となる。

次に私は寅彦の控えめということをいおうと思う。いやしくも他人の迷惑にな

るようなことは絶対にいわないというのはもちろんであるが、自分の意見を述べる場合でも遠慮しながら述べている。それは「・・・という気がする。」という表現がいかに多いかを見てわかる。しかしその柔らかい表現のなかに実に硬い主張がなされている場合が多い。私は「天災と国防」の後記のなかでその一面を指摘しておいたのであるが、今度の文庫版随筆集の「後語」において小宮豊隆は「私に不思議に思われる事は、寅彦の書くものの中の、峻厳な批評的精神が、科学的精神がとかく見落とされ勝ちである事である。これは寅彦の書くものは、いわば筋金の通った柔らかかな手といった感じを持っているところから、読者はその柔らかかな肌ざわりを味わう事だけで満足してしまつたためではないかと思われるが、しかしこれは真に寅彦の書くものを味わうゆえんではない。寅彦の真骨頂はむしろその筋金にあるといつても決して過言ではないのである。」と述べている。まさにそのとおりである。「地震国防」(同前、第二巻、三〇〇)のなかに

「この恐ろしい強敵に備える軍備はどれだけあるか。政府がこれに対してどれだけの予算を組んでいるかと人に聞いてもよくわからない。ただきわめて小數な學者達が熱心に地震の現象とその生因ならびにこれによる災害防止の研究に従事している。そして実に僅少な研究費を与えられて、それで驚くべき能率を上げているよつである。おそらくは戦闘艦の巨砲の一発の値、陸軍兵員の一日分のたくさん代金にも足りないくらいのお金を使つて懸命に研究し、そして世界的に立派な結果を出しているよつである。そして世間の人はもちろん政府のお役人たちもそれについてはなんにも知らない。」とある。この短い一節のなかに「・・・よつである」が二箇所も使つてある。しかし、これなどはむしろ希にみる強い表現の例である。

なおこの他にも挙げようと思つた要素がたくさん残っている。しかし、この序説はもはや打ち切らなければならない。さらにここに使わなかつた材料にもこの考察を押し広めたい希望をもっている。その際増補すべきことは多くあると思つが、ここに述べたことに訂正を要するよつなことはおそらくあるまいと思つ。

四 寅彦の愛

以上において私は寺田寅彦を理解せんがためにその諸要素を抽出することを試みた。そしてこの研究を、寺田寅彦がわれわれをひきつけるのはなぜであるか、という問題に沿つて進めてきたことは記述のとおりである。右に行つた考察はまだ十分ではないけれども、到達しただけの限りにおいて、最初設定した問題に答えてみようと思つ。そしてその答は、それは寅彦の愛である、と私はいおうとする。あおの愛はまず物をその本来の形においてよく理解してやることから始ま

る。そうして、物のあるべきところにあらしめようとする愛である。その愛はもとより舐めるような愛でないことはいうまでもない。それは温かくして冷たい愛である。温かいというのは深い思いやりの側を指すのであり、冷たいというのは透徹した理性の側を指したのである。その猫や象やピアノや芝生に対して表された彼の愛は前節において例示したとおりである。人間に対してはどうであるか。

「猫の死」(同前、第二巻、一五二)のなかで彼はこう書いている。

「"Miserable misanthrope" の言葉が時々自分を脅かす。人間を愛したいと思う希望だけは充分にもっていながら、あつさはかな「私」にさえぎられてそれができないで苦しんでいるわれわれが、小動物に対してはじめて純然な愛情を傾けるのは、これも畢竟はわれわれのわがままの一つの現われであろう。自分は猫を愛するように人間を愛したいとは思わない。またそれは自分が人間より一段高い存在とならない限り到底不可能な事であろう。しかしそういう意味で、小動物を愛するという事は、不幸な弱い人間をして「神」の心をたえ少しでも味わわせしめる唯一の手段であるかもしれない。」これによって、その愛の性質のいかなるものであるかがわかると思う。この愛は温かくして冷たいがゆえに、たやすくふりそそぐことはできない。それと同時に、よくこれを受容しうる者しか受けることはできない。

私はさきに彼の科学について述べたとき、彼のもとへ教えを乞いに人が集まったのは必ずしも彼の学術のためばかりではない、といった。われわれを惹きつけたものは、この場合にもやはり上述の愛であったと思う。どんな問題を持っていても、その人の身になって考えてやる、ということをや彼はなしている。またいっそう手近なことをいえば、彼は自分の研究助手をも一個の学者として優遇している。これらのことはいっしょくとして容易に実行されることではないのである。

私は寺田寅彦がわれわれを惹きつけるのは寅彦の愛である、との結論を述べたのであるが、小宮豊隆は随筆集『後語』において、「寅彦の書くものには、寅彦の芸術感覚と科学感覚とが至るところに光彩を放っている奥に、真に芸術家であるとともに真に科学者である高い「人間」が座を占め、人生批評であるにしても社会批評であるにしても、世界的に自由であり、現実的に凱(がい)切でありながら、常にそれが大きな愛で包まれているところに、大きな魅力があるという事も、恐らくだれでも知っている。」と書いている。すなわち「大きな愛で包まれているところに大きな魅力がある」ということを指摘しているのである。してみれば私のいささか詳細にこの愛を述べたつもりであり、私の結論が別の一つの支持を得ることはあっても、この「後語」の前に私の結論を変更するの要を認めない。

(一九四八・五・三)

著者後記

これは二、三年前にある雑誌のために書いたものであるが、その雑誌が出なくなったので返却してもらって筐底に蔵しておいたのである。今度寅彦全集が再版されるといっているので思い出して取り出してみた。そうして寅彦研究の一助にもならばと思い発表することにした。原稿を見ると一九四八年五月二三日の日付があり、小著「寺田寅彦」に着手する直前にかいたものである。今になればさらに手を加えたい気もするが、また一方において、生まれてしまった子供の出来がわるいといつて生み直しはできないという気もするのでその俛にしておく。これはほんの「序説」であって、「本説」は追々やってみたいと思っている。

(一九五〇・三・一五)

(編者注) 寺田寅彦随筆集”からの引用文および引用個所の表示は現代表記による現行の文庫本(一九六四年第二刷改版発行、以降のもの)によった。また著者後記に書いてある「雑誌」は三輪福松氏によって計画されたものであった。なお、これを発表することにしたと書いてあるがこれも実現せずに未発表原稿となったものと思う。(K)(K)